

かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第30号（令和2年6月）

あゆむ「コロナのせいで、なんだかのびのび
できなくなったな！」
ミドリ「ストレスがたまるわね！」
ふみお「コロナウイルスは前からあったけど、
今回のものは新型だからな。」
文じい「人類は災害と感染症には、苦しめ
られてきた。明治10年ころからの
“虎列喇（コレラ）”という伝染病の
流行のときは、山形県だけで、明治
12年に1,118人が亡くなったという。
しかも、19年になっても1,550人。
28年でも873人も亡くなった。」
ミドリ「ええっ、そんなに！」
あゆむ「それじゃあ、このようなくらしがこれか
ら何年も続くの？」
ふみお「いや、今は、医学も進歩しているし、情報
も機器類も多いから・・・。」
ミドリ「そうね、でも、逆に昔に比べれば人や物
の行き来は多くなっているわ。やっぱり
注意してくらしていかなければ・・・。」
あゆむ「でも、ちょっとどこかに行こうよ！」
ふみお「うん、今日は外にあるものということで
板碑を見ようということだ。」
あゆむ「え、また板碑。」
文じい「ふむ、まあ、ほら見えてきた。あれじゃ。」
ミドリ「え、道が分かれるけど、どこ？」
文じい「その分かれ道の間にある板碑じゃ。」
あゆむ「あ、あの黒っぽい石だな。」



さんぼんまつ
三本松の
げんろく
元禄四年
おいわけいたび
追分板碑



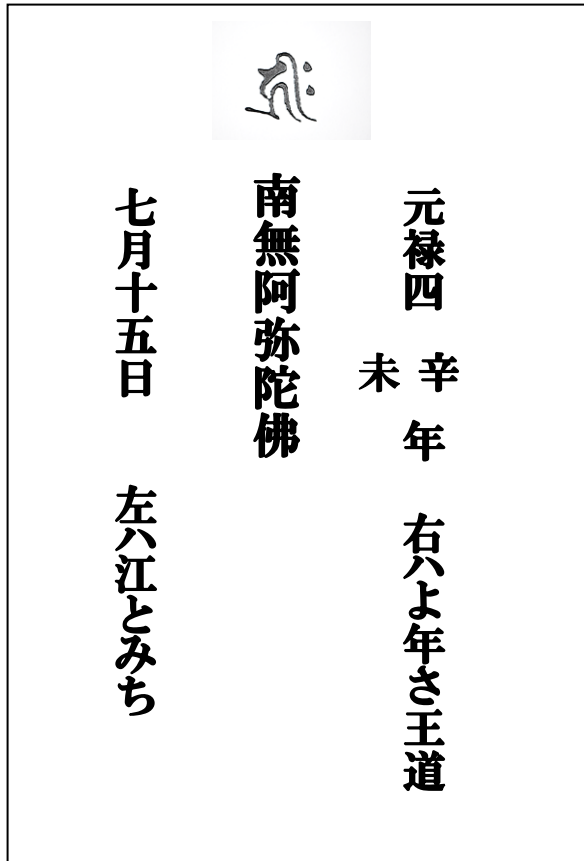
ミドリ「近づいて見てみましょう。」
あゆむ「おもしろい形をしているな。それで、何
とほってあるのかな？」
ミドリ「少しわかる。この字、“さ”とか“道”じ
ゃない？ その上は、右でしょう。」
あゆむ「おお、こっちは、“み”と“ち”だよな。」
ミドリ「それで、“みち”じゃない？ それに、上

の字は“左”かもね。」

ふみお「右、“〇さ〇道”。左、“〇みち”というわけか。」

文じい「上の方にも彫られているぞ。」

ミドリ「そういえば、板碑には“種子”があって、何か供養することはが彫られていることが多かったわね。説明板があるわ。」



ミドリ「種子は、たしかキリーク、つまり阿弥陀如来様だったわね。」

文じい「ほほう、よく覚えておったのう。それで、“南無阿弥陀佛”が刻まれておる。お念仏し供養したものじゃろうのう。」

あゆむ「“よ年さ王道”とか、“江とみち”というのはどういう意味？」

文じい「“年”は“ね”。“王”は“わ”。“と”は“戸”。」

ふみお「なるほど。それで、“よねさわ道”つまり“米沢道”。“江とみち”は、“江戸道”！」

あゆむ「右に行けば米沢。左に行けば江戸か。」

文じい「そう。それで、このような分かれ道のところを、“追分”と言っておる。」

ミドリ「なるほど。でも、どうして追分の行き先と南無阿弥陀佛がいっしょなの？」

文じい「法要をして建てた供養碑に、後の時代に、行き先の文字を刻んだようだ。このような追分の碑はあちらこちらにある。」

ふみお「説明板に、“角力（関取）大山沢という者が背負ってきた石と伝えている”と書いてあるけど・・・。」

文じい「ふむ。梅津吉造さんが著した『上山郷土史物語』によれば、阿弥陀地に大山沢という力自慢の人がおったらしい。ある時、本職の大相撲が八幡川原にやってきたとき、飛び入りで土俵に上がった。そして、数人を投げ倒してしまったという。それで、最後、大関の七夕という力士と一騎打ちとなった。」

あゆむ「おお、それでどうなった？もしかして、大山沢が勝った？」

文じい「そうなんじゃ。ところが、恨んだ七夕たちから襲われて、命を落としたという。」

ミドリ「まあ、かわいそうに。」

あゆむ「大相撲なのにひきょうだな。それにしても、こんな大きな石を背負って運んできたんだから、よほどの力持ちだったんだね。下の石も大きいよ！」

文じい「力持ちの者が運んだという伝説もあちこちによくある。ここは、三本松という地区で、そのことがあってから、地区では、七夕をやらなくなったともいうが・・・。」

ミドリ「ふーん。三本の松があったといわれるところね？ 奥にも、説明板があるわ。平成26年にこの碑を移したんだって。そして、一葉三本の松（三鈷の松）を植樹したとあるわ。あら、この松ね！」

ふみお「ところで、“江戸道”というけど、ここは、“羽州街道”と言わなかった？」

文じい「いい疑問じゃ。道については、ほかのところも見ながらさらに考えてみよう。」